

キマイラ・吼 シリーズ10

キマイラ独覚変

夢枕 獯



ソノラマ文庫

ソノラマ文庫〈504〉

キマイラ・吼¹⁰

キマイラ^{どつかくへち}独覚變

シノラマ・ソノラマ・ソノラマ

1989年12月30日 初版発行

著 者 夢枕 獏

©Baku Yumemakura 1989

発行人 広橋敏栄

発行所 株式会社 朝日ソノラマ

東京都中央区銀座 4-2-6

第2朝日ビル (〒104)

振替番号 東京2-40311

電話番号 03-563-6021~3

印刷製本 図書印刷株式会社

ISBN4-257-76504-6

Printed in Japan

ソノラマ文庫

キマイラ独覚変

夢枕 獏



朝日ソノラマ

イラスト／天野喜孝

目次

序章	5
第一章 雪蓮	30
第二章 望郷	63
第三章 秋雨	105
第四章 夢笛	147
第五章 吐血	189
第六章 修羅	206
転章	233
あとがき	237

本書は『獅子王』1989年5月号、6月号、7月号、
11月号、12月号、1990年1月号に掲載されたものに
加筆訂正したものです。

序 章

1

虫が鳴いている。

ひんやりした秋の夜気の中で、虫が鳴いている。

無数の蟋蟀フオロキの鳴く声に混じって、鈴虫の澄んだ声が、ふたつ、みつつ。闇の中で、薄いガラスを震わせるように、その声が聴こえている。

透明な夜気の中に、透明なその虫の声が響いている。

あとは、草が、小さく風に揺れるばかりである。

さわ

さわ

わずかな風に揺れる草のささやきまでが、鮮明であつた。

虫の音。

風の音。

それらが、かえつて静寂を深めている。

その静寂の中で、真壁雲斎は、宇名月典善と向かいあつていた。

典善が、その肉体から放っている殺気を断つた途端に、秋のその静寂がもどってきたのである。雲斎は、素足を、浅くスニーカーに突っ込んだだけで、そこに立っていた。スニーカーの踵を踏んでいる。

きつちり、スニーカーを履くだけのゆとりが、大鳳を前にした雲斎にはなかったのである。

闘いが始まれば、その闘いに応じて、スニーカーは脱ぎ捨てねばならない。

しかし、その闘いがいつ始まるのか。それが、わからない。

すぐに典善が仕かけてくるのか、こないのか。

殺気の失せ、典善の動きは、予想がつかなかった。

殺気だけではない。

典善の肉体からは、一片の気配すらも、発せられてはいない。

不気味な、気配の沈黙であつた。

透明感があるようでいて、透明感はない。

気配はないが、妙な存在感がそこにはある。

宇宙月典善という肉体の形状をした暗黒——無色、無臭、無気配の暗黒だ。

もし、ここが、生命の絶えた砂漠の真ん中か、宇宙空間であれば、典善のその無機質は、完璧かんぺきに周囲と同化していたかもしれない。

しかし、円空山のその庭は、静かな生命の気配で溢あふれている。

草が、虫が、花が、樹が、おそらくは肉眼では見えない無数の細菌でさえ、気配を放っている。幾億もの極小の宝石が、闇の中で光を放っているように、その庭は、生命の気配で満たされていた。

その庭の一角に、無機質の暗黒がある。

もし、典善に気配があるとすれば、同じ量の、錆びた鉄の持つ気配と同じものだ。周囲に生命の気配が溢れているため、逆に、典善の無機質が見えてくるのである。

雲斎は、静かにそこに立っていた。

雲斎の気配は、ことさら断たれてはいない。

また、逆に、外に向かつて放たれてもいない。

草や、花の香気が、自然に大地の中に溶けてゆくように、雲斎の気配は、風に吹かれ、ゆるゆ

ると夜気の中に溶けてゆくのにまかせているばかりである。

雲斎の気配は、捕らえようと思えば捕らえることができる。

しかし、その気配を捕らえても、雲斎の周囲を包んでいる他の気配との区別は、まず、つかない。

気配が外へ流れ出している雲斎の方が、むしろ不思議な透明感があった。

雲斎の方から仕かけてゆく闘いではない。

典善の方から、仕かけてくるべき闘いである。

しかし、典善は動かない。

攻撃を仕かけるタイミングをつかめないからである。

雲斎の背後には、大鳳が倒れている。

血の匂いが、雲斎の鼻に届いてくる。

大鳳の肉体からは、今も、血が流出し続けているはずであった。

「血が、出てゆくな……」

ふいに、典善がつぶやいた。

大鳳の血が、流れ続けていることを言ったのである。血は流れ続け、その出血がある量を越えれば、大鳳が死ぬことも考えられる。

典善が、雲斎の心の動揺を誘ったのである。

ほんの一瞬、雲斎の気持ちちが、大鳳に動いた。

雲斎の気配に、その一瞬だけ乱れが生じていた。

宙に浮いていた蜘蛛の糸が、自重で、わずかに下がったほどの乱れであった。

その針先ほどの隙を、典善は逃さなかった。

典善の姿が消えていた。

かわりに、それまで典善が立っていた場所と、雲斎との間の空間に、鋭い銀光があった。

月光の中を、その銀光は、雲斎めがけて疾つてくるところであった。

首を沈めて、雲斎はそれをかわした。

鋭利な刃物が、闇に銀光を引いて、雲斎の背後に開いた小舎の入口から、小舎の内部へ疾り抜けた。

顔をあげた雲斎の頭上から、

「甘いわ、雲斎！」

典善の声が注いだ。

典善の身体が、月光の宙に浮きあがっていた。

跳躍した宙のその場所から、すでに、典善は次の刃を放っていた。

その銀光が、斜め上方から、雲斎に向かって疾^はってくる。

隠剣^{おんけん}であつた。

雲斎は、戦慄^{せんりつ}していた。

典善の意図がわかつたからである。

その隠剣を雲斎がかわせば、その隠剣は、間違いなく、背後で倒れている大鳳の肉体に突き立つであらう。

かわせない。

ならば、素手でその隠剣を叩き落とすか、宙でそれを掴^{つか}まねばならない。

昼ではない。

月光があるとはいえ、夜である。

素手で隠剣を叩き落とすこともできようし、手に掴むこともできよう。

しかし、それでは、かなりの確率で、手に傷を負うことになる。

疾^はってくる銀光の向こうに、

にいっ

と笑みを浮かべた典善の顔が見えた。

「ちいっ」

雲斎は、横へ身体を開きながら、その隠剣を、真下から蹴りあげていた。音がした。

隠剣が、何かを貫く音だ。

音をたてて、雲斎のすぐ背後に落下したものがあつた。

深々と、靴底を隠剣に貫かれた、右のスニーカーであつた。

大鳳と、雲斎との間に、そのスニーカーが転がっていた。

雲斎は、素足になって、草の上に立っていた。

すでに、もう一方のスニーカーも、脱ぎ捨てている。

その脱ぎ捨てられた左のスニーカーは、雲斎の左足の下にあつた。

爪先が、浅く、そのスニーカーを踏んでいた。

典善の次の攻撃によつては、また、そのスニーカーを利用することになるかもしれない。あつた。

すでに、草の上に降り立った典善と、雲斎は、再び対峙していた。

さっきよりも、互いの距離は半分に縮まっている。

しかし、まだ、互いに肉と肉とをぶつけあう間合いには入ってはいない。

「さすがよな、雲斎……」

讚美の響きが、典善の声にはこもっていた。

「おそろしい男よ」

雲斎はつぶやいた。

不思議な感動すら、この眼の前の老人に対して、雲斎は味わっていた。

相手の弱みを瞬時に嗅^かぎつけ、その弱みを徹底してねらってくるそのやり方に、である。

この場合、雲斎の弱みは大鳳である。

その弱みを、典善は突いてきたのである。

「おそろしいと言われると、ぞくぞくして嬉^{うれ}しくなってきたきやがるぜ」

典善が言った。

その時――

「鳥だぜ――」

男の声が、闇の中から届いてきた。

翼を打ち鳴らす鳥の羽音が、宙に響いた。

白いものが、宙を、横手の闇の中から飛んできた。

鶯^{サギ}であつた。

白い鶯が、ふたりの頭上の風の中を飛んだ。

と――

ふいに、それは、鷺の形に切り抜かれた一枚の紙片となって、ふわりと闇に翻ひるがえって、草の上
に落ちた。

その紙片に文字が書かれていた。

霊。

宿。

動。

その三文字が、黒々とした筆文字で描かれていたのである。

「ぬう!？」

典善が、斜め後方に跳んで、雲斎から距離をとり、草の中に腰を沈めていた。

「ざまあねえや、雲斎——」

声が出た。

雑木林に近い草の中に、額が大きく禿はげかけた、ひとりの老人が立っていた。

ぼろぼろの、白い道服を身に纏まとった老人であった。

埴輪道灌はにわどうかんであった。

「道灌」

雲斎がその老人の名を呼んだ。

「なかなかよいところへ、来合わせたらしいな」

道灌が笑みを浮かべていた。

「やい、雲斎。おめえ、これからは、自分よりもこのおれに、酒を一杯余計に飲ませるんだぜ」

「」

道灌が、飄々^{ひょうひょう}と、草の上を歩いてきた。

「ぬかせ、道灌。いつも余計に飲んでるくせによ」

雲斎が言った。

道灌が微笑した。

草の中から、典善が道灌を見ている。

「道灌とやら、おぬし、幻術^{めくらまじ}を使うかよ」

典善が、腰を沈めたまま言った。

「おぬし、武術をやるか——」

道灌が言うと、

「おう」

低く典善が言った。

「何を学んだ？」

「我流さ」

典善が、さらに、後方に身を退いた。

「典善、今夜のところは、おとなしく身を引け。この馬鹿は加減を知らんから、闘えば怪我をすることになる。いかにぬしとはいえ、我等ふたりを、ここで相手にはできない」

雲斎が言った。

しばらくの沈黙があった。

ふいに、典善が草の上に立ちあがった。

炯と光る眼で、雲斎と道灌を睨んだ。

「わかった……」

ふふ

かか

と、典善が唇を歪めて笑った。

大量の気が、みしみしと音を立てるようにして、典善の肉体から、夜気の中に流れ出した。

「今夜のところは、引きあげておくかよ」

典善が言った。

背を向けずに、典善が後方に下がってゆく。